

同じ星を見ている MUMEIngoJ6

同じ時。

同じ空の下。

同じ太陽の下。

同じ星を、彼らは見る。

されども反応は

「きゃっ」

唐突に地面が揺れ動いたことで、エリアC - 1を移動していたエースが体勢を崩してしまう。腰まで届いてしまいそうな紫色の髪を乱しながらも、消えるマントを纏っている彼女の姿を捉えることはできない。

目視不可能である上に、思わず零れた悲鳴も小さなもの。ゆえに彼女は誰の助けも得られず、塗装されてない地面に身体を打ち付けてしまうことになる。そのはずであった。

「痛たた……って、あら？」

「うはwwwエースちゃんwww後ろからなんてwww大胆ねwwwんもうwwwwww」

「へ？ あ、ええっ！？」

いつまで待っても衝撃が訪れないことに、来たる痛みを覚悟していたエースは目蓋を上げた。すぐさま状況を理解して、目を白黒させる。運がいいのか悪いのか、ちょうど同行していたナイトの方へと転んだらしい。

「ってかwwwwww何か当たってるwww当ててんのよwwwってやかましいわ！wwwwwwwww」

「な、なななあ！？」

笑顔と共に告げられた言葉に、エースは素っ頓狂な声をあげた。ゆっくりと視線を落としてから、その見えない耳が真っ赤に染まった。何とか離れねばならない、せめて身体の変角を角度を変えるだけでも。心の底から考えるが、終わったかと思えば再開する地震により叶わない。必死になっている彼女に注目する余裕はないが、ここはナイトウの脚力に注目するべきである。

前衛ではないとはいえ、エースとてかなりの修羅場を潜り抜けている。そんなエースが自由に動けないというのに、ナイトウは他人の体重を背に受けても一寸たりとも動かない。なぜかやたらと可変する震度に加えて、彼らがいるのは山岳。ただでさえ足場がよくない地帯である。

動かざること山の如し そんな言葉を体現しているのは、長き時をかけて鍛え抜かれた肉体

あってこそ。

(絶対にwww動かんwwwこの感触www逃すまいwww)

もっとも、その肉体を操る頭脳の方はえらく不純であるのだが。

そのまま暫くが経過し、一際大きな揺れの後に地震は収まった。

今回ばかりは、倒れた自分が悪い。

そう思ってうずくまるエースをわざわざ煽るようにして、ナイトウは顔を覗き込んだ。

「堪能wwwさせてwwwもらいましたwww」

「……………っ！」

いらんことを言ったせいで頬に手形が付いているが、ナイトウの笑みは絶えることはない。

もう相手をするだけ無駄だと悟り、エースは脱げてしまっていたマントを羽織る。

透明となったのを確認して、口を開いた。

「にしても何だったのよ、あの地震は」

「ああwwwアレはwww隕石の影響www近くに落ちてたっばいwww」

「隕石い？」

「時魔法でwwwそんなのがあるwww」

いまいち理解しきれずにいながら、エースは眼前の相手を眺める。

出会った頃から浮かべっぱなしの笑い顔を見つめると、肩をすくめた。

ナイトウはいつもよく分からないヤツだったか、と一人納得したのである。

「……で、どうするのよ。その時魔法っての使うのがいるんでしょ？」

「もちろんwww当然www無論www言うまでもなくwww突撃www」

「でも隕石落とすなんて、本当なら凄く強いんじゃない？ そんな何も考えずに」

「あれだけのメテオwww使える時魔導士なんざwww俺の知り合いwwwくらいwwwそれwwwにwww」

「それに？」

「仮にwww俺にwww殺意を向けるのならwwwこの剣のサビにwwwしwwwてwwwくwwwれwwwるwww」

うはwwwこれはwww惚れるwww

ナイトウがそんな思いとともに紡いだ言葉には、深い深い溜息だけが返ってきた。

【一日目・午後 / C - 1 北西部 山岳】

【ナイトウ (男ナイト) @FINAL FANTASY TACTICS】

[状態]: いつでも毎日骨太www (健康)

[装備]: オートクレール@Romancing Sa・Ga

[道具]: 支給品一式、不明支給品 0 ~ 2 (本人曰く勇者には必要ない物らしい)

[思考]

基本: うはwww殺し合いwww生理的にwww受け付けられないwww

1: 隕石凸wwwイヴァリースから来ますたwww

2: エースちゃんはwww勇者のオレがwww守るwwwでお付き合いからwww

[備考]

アクションアビリティ白魔法、その他アビリティ不明

【エース（エスパーギャル）@魔界塔士Sa・Ga】

[状態]：透明

[装備]：消えるマント@FINAL FANTASY TACTICS

[道具]：支給品一式、不明支給品0～2

[思考]

基本：とりあえず殺し合いに乗るつもりはない

1：とりあえずナイトウに守ってもらおう。

[備考]

参戦時期は神撃破後。

透明は彼女が何かアクションを起こさない限り認知されません。

時魔法については半信半疑。

同じくエリアC - 1にて、藤林沙理子という名の少女が地面にへたり込んでいた。長い黒髪が目を引き彼女の身体は、まだまだ成長し切っていないように見える。しかしながらまだ顔付きにあどけなさが残る彼女は、少女の記憶と姿を奪い取った地球外生命体・ワーム。

人間の殺害に躊躇することなどなく、ゆえにこの殺し合いにおいても優勝を目指していた。デイパックから出てきた電撃を放つ銃を手にして以来、彼女は自身を『参加者内では強者に位置する』のだと思い込んでいた。

ほんの少し前までは、

「何、よ……あれ……」

唐突に地面が揺れたので、沙理子はそちらの方向に視線を向けた。そしたらワームの視力は、とんでもない物を捉えてしまったのだ。降り注ぐ隕石の姿を。偶然、あの地に隕石が落ちてきただなんて考えられない。あんなピンポイントに、幾つもの隕石が近くにばかり落ちるものか。そうなれば、考えられるのは一つ。衛星砲のようなものが支給された。正直、それも沙理子にはありえないと思える。しかしながら起爆する岩が支給されていたのだ。もはやありえないとは断定できない。沙理子は苦々しい表情で歯を軋ませた。ワームの身体に電撃を放つ拳銃、自分でも決して弱くはないと思う。けれども落下してくる隕石相手にどうしろというのか。クロックアップが使える成虫ならともかく、まだ沙理子はサナギなのだ。そもそも成虫化できるかすら分からない。

「……………無理、ね」

思わず零れた弱気な言葉は、紛れもない沙理子の本心。だが、あくまで『直接戦うだけでは』無理という話。まだやりようはある。殺し合いなどゴメンだと言う輩は少なからずいるだろう。そんな人間たちが集えばチームを組む。その中に紛れてしまえばいいのだ。戦いとは数だ。質で劣っていても圧倒的な数には埋め尽くされる。その数で殺し合いに乗った参加者を駆逐し、その後に油断しきっているチームを丸ごと討ち取ればいい。都合のいいことに、擬態している肉体は年端も行かない少女のもの。

戦闘を他人に任せて守ってもらうポジションに着くのは、決して難しくないだろう。
何より、彼女は元々そんな『藤林沙理子』を演じてきたのだから。
己の演技力に騙され続けてきた人間の姿を思い返し、沙理子は見た目に反した老獪な笑みを浮かべた。

と、ここで沙理子は目を見開いた。

隕石を落とした参加者が、もう息絶えたとは限らない。
だというのにこんなところで油を売っているなんて、命が惜しくないようではないか。

「と、とりあえず離れよーっ！ 今すぐ離れよーっ！」

しどろもどろでデイパックを手にとると、沙理子はとてとてと走り去っていった。

【一日目・午後 / B - 1 南部 山岳】

【藤林沙理子 (サナギ体ネイティブ) @仮面ライダーカブト】

[状態]: 健康、人間体

[装備]: プラストガン@FFT、

[道具]: 基本支給品 × 1、不明支給品 × 0 ~ 1 (確認済み)

[思考]

基本: 殺し合いに勝ち残る。

1: C - 1 から離れる

2: 『藤林沙理子』を演じて、殺し合いに乗り気でない参加者たちに守ってもらう。

036: この剣に懸けて	投下順に読む	038: 気まぐれサイケデリック (後遺症)
036: この剣に懸けて	時系列順に読む	039: 地獄少女
024: バカと天才は紙一重	ナイトウ	038: 気まぐれサイケデリック (後遺症)
	エース	
027: 変質者達の狂演	藤林沙理子	053: キックOFF

—